

善導教學思想における末法思想の影響

三 枝 樹 隆 善

善導教學の思想的立場を理解するに當つて、はじめに見逃すことのできないものは、當時、仏教界においてその思想的動向のなかで、とくに注目せられる末法思想である。この末法思想を根底として、人間性に基づいた新しい宗教を宣布したのは、三階教の信行であり、淨土教の道綽である。随つて道綽よりうけ継がれた善導の宗教的教學思想の立場としても、この末法思想の影響は、まづオ一にとりあげねばならないと思う。ここにいう末法思想とは唐代において、まづたく一般化されたものを意味するものであつて、すなわち、教法の変遷につれだちて法滅思想および五濁思想と結びついて行かれたものを指すのである。したがつて、末法時において仏教ならび僧侶の頽廢、社会の濁亂、人間の罪惡など痛切に感じられることはいうまでもない。

さて、それならば末法思想が、善導の教學思想にどのような影響を与えたであらうか。道綽の中心的思想を継承するとみられる善導の著述に、末法の語についてことさらにあげていない。それは師の道綽のように、正像末の三時に対する見解や『大集經』の五五百年説などに対して、何等批判するところがない。これは当時の時代思潮をかえりみるとき、むしろ不思議とせられるものであるが、しかし、善導にとつて末法という語は、ことさら

にとりあげる必要がなかつたと思われる。それは師の道綽が主張した末法という時代觀を充分に把握したからである。末法觀に立脚して説かれた、道綽の淨土教思想をうけ入れる善導において、もはやそのようなことは、時代と環境との立場から、すでに人間自身への立場に移向したものと思う。このことは、かれの主著『觀經疏』に、一貫して説かれる徹底した人間觀によつて知られるものである。

ところで道綽が、 \wedge いま時の衆生を計るに、すなわち仏世を去りて後の才四の五百年に当る \vee といい、また \wedge 当今は末法觀に是れ五濁惡世なり \vee と思想し自覺して、断言したことは、善導において決定的なものとして思想された。すなわちそれは、

我等愚痴身、曠劫來流轉、今逢釈迦仏、末法之遺跡、彌陀本誓願、極樂之要門、定散等回向、速証無生身

と述べていることによつて察知できる。

道綽が \wedge 五濁 \vee ということを、善導は『觀經』の \wedge 濁惡不善 \vee を \wedge 五濁 \vee であるとして解釈している。すなわち、

言濁惡不善者此明五濁也、一者劫濁、二者衆生濁、三者見濁、四者煩惱濁、五者命濁、言劫濁者然劫實非是濁当劫滅時諸惡加増也、言衆生濁者劫若初成衆生純善劫、若末時衆生十惡彌盛也、言見濁者自身衆惡總變為善他上無非見為不是也、言煩惱濁者当今來衆生惡性難親随对六根貪瞋競起也、言命濁者由前見悩二濁多行殺害無慈恩養既行断命之苦因、欲變長年之果者何由可得也、然濁者礼非是善今略指五濁義竟。

このような解釈を施すことは、道綽の八五濁惡世Ⅴを断定したことに意味づけてもよからう。これは一例にすぎないことであるが、善導の教學思想が道綽よりうけつがれていることは、すでに多くの人が知るとおりであり、また道綽の「安樂集」と善導の著述五部九卷とは対照して考証するならば、随処に善導が道綽の主張をうけ入れていることは目立つて看取されるのである。山本仏骨氏が述べられるように、善導の「觀經疏」は、一面「安樂集」の演沢であり、徹底化であるとして見ることもできよう。善導の楷定を啓発し、その基盤を得せしめたものこそ、実に道綽であつて、二祖の法脈路についても密接不離な關係を見ることができる。

さて善導は、道綽の宗教的立場における人間の問題と、さらに一步を進めて深くほり下げた。それは道綽が主張した末法觀をうけ入れることによつて、まったく新しい見地から「觀無量壽經」をみなおしたことにある。ことばを換えていえば、かれは「觀無量壽經」に説かれてあるところの眞の意味を、末法觀によつて把握したともいえようか。「觀無量壽經」が八機Ⅴの眞実を顯わすものとして理解するならば、そこに説かれる機類は利根ではなく、まったくの鈍根たる凡夫であることが看取されたのである。すなわち、「觀無量壽經」に説かれているイダイケ（韋提希）夫人を、淨影寺慧遠や天台智顗などは、大ボサツ（菩薩）とみなして高く評價しているが、これに反して善導は、

正明夫人是凡非聖、由非聖故、仰性聖力冥加、彼國雖遙得觀

と述べて、イダイケ夫人は聖の人ではなく、まったく凡夫の性をもつ人であるとみている。また九品段におけるすべての往生人は、ことごとくが凡夫であることを次のように述べて

いる。すなわち、

看觀經定善及三輩上下文意、總是仏去世後五濁凡夫、但以遇緣有異致令九品差別

このように、ことごとくが凡夫であると看取している。しかしながら、浄土教がもともと凡夫の爲にするVということは、必ずしも善導に限るものではない。が、しかし末法濁惡の凡夫という觀念がより強力に認められることは、道綽の主張する末法思想の影響によつて、これを強く意識し自覺することによるものと思う。これは、曇鸞の教學思想と對比して考えるとき、極力、阿彌陀仏の本願を説きながらも、徹底した罪惡生死の凡夫としての人間觀は、曇鸞教學において見出すことはできない。それは曇鸞の時代において、一面、切々たる末法觀の意識されなかつたことを意味するものであつて、時代的差異というより外はないであろう。いづれにしても、善導が『觀經』に説かれてあるすべてのことがらを如実にみることでできたのは、道綽の末法を主張する中心的思想を稟承したからであるといふのであろう。

さて、このように『觀無量壽經』を如実にながめ、そして眞の意味を把握して大經すなわち『無量壽經』をみなおした。そこに説かれる阿彌陀仏の本願（四十八願）は、ことごとくが末法濁惡の罪惡生死の凡夫のための大悲であることが信知されたのである。ここにおいて、かれの宗教的思想の立場は明確となつたのである。すなわちこれは八三心釈Vに説かれる八機法二信Vの確信的思想である。

一者決定深信、自身是非惡生死凡夫、曠劫已來常沒常流轉、無有出離之

縁

二者決定深信、彼阿彌陀仏四十八願、撰授衆生、無疑無慮乗仏願力定得往生

この八機法二信Vをもつて、さきにあげた八我ら愚痴の身、曠劫よりこのかた流転して今、釈迦仏の末法の遺跡たる、彌陀の本誓願極樂の要門に逢えりVと、『觀經疏一開卷才一に述べることを考察するとき、末法思想に對する善導の立場が見出されるのである。いわゆる八機法二信Vの確信的思想は、末法を思想を基盤として、善導の教學思想の立場が一そう明確となるであろう。

そしてまたこのことは、一面、仏典の中に説かれる五濁および法滅などをふくむ末法思想が單なる時代意識としてみられたばかりでなく、あるいはまた、むやみに宿命觀をいびかせるものでもなく、善導はどこまでも末法の自覺が人間存在そのものに結びつくものとせられた。それは、実存として思惟せられる人間が、苦惱をもち罪惡の課題を負わされていることを告知したからである。

またこのような人間的苦惱は、特定の時代にのみ結びつくものではなく、内面的人間の反省において、時代を超えたところの人間の根源的罪惡の自覺にたつものである。されば善導は、一般に時代苦として内觀せられた末法の重厭から、むしろ歡喜への躍進として、その道を本願の救いに求めて行つたのである。かれが『往生礼讚一に

万年三宝滅、此經住百年爾時聞一念皆當往彼、願共諸衆生往生安樂國と述べていることは、とくにこのことを意味するであろう。このように末法濁惡の世、そ

して人間は罪惡の鈍機と自覺することにおいて、そこに如來の大悲がそがれることを信知された。かの八信法Ⅴの確信的思想がそれである。

要するに、濁世末代の罪惡生死の自覺が決定づけられたことは、道緯の主張する末法思想を基盤とするものである。この基盤なくしては、恐らく『觀無量壽經』に説かれる真の意味は把握できなかつたであらう。聖道門諸師はもちろん、曇鸞においてさえそうであつて、まったく善導が古今の理解を楷定して八凡入報土Ⅴの教学を成立せしめたことは、末法思想の甚大なる影響といわねばならない。